**説教20230122申命記18：15-20マルコ1：21-28「預言者イエス」**

**今日は、「汚れた霊」について語られますので、私たちは、聖霊によってしっかり立ち、聖霊の御守りと導きを願って参りましょう。聖霊は今日に限らず、いつでも大切ですが、汚れた霊は、聖霊がいないところに、忍び込んできて、私たちの幸いや喜びを奪い去っていくのです。ですから、今日、汚れた霊のことに触れる私たちは聖霊によってしっかり守られましょう。**

**イエス様が、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげてすぐに出て行ったのですが、それはなぜでしょう。それはイエス様も聖霊に満たされて、聖霊の力によって、汚れた霊にすぐに打ち克たれたからです。**

**さて、今日の説教題は、預言者イエスですが、その前に、教師イエスについて語って参りましょう。イエス様は人々から、「先生」と呼ばれて、イスラエルの教師と目されていました。そして、今日のマルコの箇所では、会堂に入って教えはじめられた教師イエス様の姿が記されています。今日の箇所は教師イエスが、人々に教えはじめられた最初の出来事かも知れません。とにかく海のものとも山の者とも知れないイエス様が会堂に入ってきて人々に教え始めたのでした。このイエス様の会堂での講義は、前後の章の記述からして、日中の数時間の出来事だったと思われます。つまり、イエス様は、この会堂に入ってすぐに教えはじめられ、すぐに人々を驚かせ、すぐに汚れた霊を追い出し、そしてすぐにイエス様の評判がガリラヤ地方のすみずみにまで広まったのでした。この個所では、この様な、イエス様の行いのテンポの良さが意識されて述べられています。**

**それは、なぜでしょうか。それは一つには、イエス様と対比されている、律法学者のテンポの悪さと比較する為だったと思われます。22節「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」マルコは、意識して、律法学者と教師イエス様との違いを、この個所で浮き彫りにしようとしているのです。**

**この会堂でのイエス様の講義で、最も恵みを受けたのは誰でしょうか。それは言うまでもなく、汚れた霊から解放されたこの男でした。ここではこの男一人が解放されたことになっていますが、この男が、「我々を滅ぼしに来たのか」と言っていることから、この男と同じように汚れた霊に取り付かれていた仲間が、他にも多数いて、会堂の一角を占めていたのだと思われます。イエス様には、聖霊によってその仲間を一人残らず解放する力が与えられていたのでした。**

**さて、聖霊ですとか汚れた霊とか、言いますと、ほんの４，５年前には、俗世間におきましては、そんなことを信じているのかと鼻で笑われるか、逆に、いわゆるスピリチュアルの世界にはまり込んで、スピリチュアルに生きる人がいたりと、霊に対する考え方や評価が定まっていなかった印象があります。しかし、コロナ渦になり、あまりにも人間の手に負えない事柄がこの世の中に山積するようになり、私たちは今、より身近に、そして現実的に霊の働きや導きを想わざるを得ないような状況にあるのではないでしょうか。**

**今の世では、親と子どもが傷つけあったり、或いは自分が自分自身を傷つけたりと言う事件が多く報道され、私たちの心はふさぎ込んでしまいます。その現場に関わっておられるお医者さんや行政の方々の心労もいかばかりのものかと思います。主なる神の癒しと慰めとをお祈り致します。**

**このように今の世でも、汚れた霊に取り付かれた人々が沢山おられます。そして今日の聖書箇所に記されています次の会話は、今日の臨床の場におきましても、なかなか信ぴょう性がある会話に聞こえます。**

**「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」「黙れ。この人から出て行け」**

**たったこれだけの会話で、汚れた霊はこの男から出て行きました。聖霊に満たされたイエス様の力は、この一言で汚れた霊を追い出すほどにパワフルであったことが分かります。**

**このような力が与えられた教師イエス様は、どんなお方だったのでしょうか。彼は、同僚や校長のお気に入りで、生徒からも好まれ、その組織の中で重用されて、終身雇用されるような人物では、ありませんでした。今、わざと、イエス様と正反対のことを上げたのですが、聖書に記されているように、教師イエス様は、上司である大祭司や、同僚である律法学者たちから疎まれ、それどころか彼らから命を付け狙われるようになり、遂には十字架に掛けられてしまいました。そして、その組織を批判し、終身雇用という安定とは正反対の生活を３年間続けられたのでした。**

**さてこの会堂でのイエス様の講義で、反対に最もイヤな思いをさせられたのは誰でしょうか。それは、律法学者たちでした。この頃の会堂と言うのは、律法学者などのイスラエルの教師たちが入れ替わり立ち帰り訪れては、自分の専門知識をその地域の住民たちに伝えていくという場所であったようです。イエス様が登場するまでは、会堂は、律法学者たちが主導して営まれていたことでしょう。この律法学者と言う集団は、ヨシア王の時代からありましたが、バビロン捕囚以降の時代、預言者が出なくなる一方で、律法学者の集団は大きくなり、この新約の時代には一大階級を形成して、時の社会を指導し、支配するまでになっていたのでした。つまり律法学者たちは、何百年にもわたって、自分たちが主導する学問を、自分たちの意のままに社会に伝達していたのでした。**

**よく言われます、律法主義の弊害と言うのは、律法学者たちが、このように長年にわたって培ってきた学問内容やその組織が生み出したと言わざるを得ないでしょう。**

**そして、この律法主義の弊害を、イエス様はほんの数時間の講義で、テンポよく、打ち破って、律法学者たちの教えの無力さ、権威がないことをたちどころに暴いてしまったのでした。さて、今の世の中も多分に律法主義的なところがありますので、私たちは、聖霊に満たされていませんと、こんな風に既存の学問や組織をないがしろにするイエス様のことをペテロの様に、とがめだてしたくなるものです。とにかく、私たちは良いことでも悪いことでもお構いなしに、いま現に存在する組織や学問に固執してしまうという罪な傾向を持っています。イエス様は、私たちのそんな罪をも、今日、テンポよく打ち砕いて下さいました。**

**教師イエス様と律法学者たちの違いは、黙想すればするほど興味深いですが、ではその違いを、今日の申命記の箇所から深めて参りたいと思います。「そうしゅつれびみん申命記」という旧約聖書の最初の５書はモーセ五書と呼ばれ、このモーセ五書こそ律法学者たちが拠り所とし、長年にわたって研究し続けてきた書物でした。なぜ彼らがモーセ五書を重んじたかと言いますと、こそには、モーセが主なる神と会話をして、主なる神からあずかった、人間全体に対する神の言葉が記されていると考えたからでした。今日の申命記の箇所でいえば 18章 17節に、主はそのときわたしに言われた。「彼らの言うことはもっともである。、とありますが、この様に主なる神はモーセに言われて、その神の言葉がモーセを通して人間全体に伝えられたのでした。申命記の時代には、この様に神の言葉が取り継げるのはただ一人の預言者であるモーセだけだったのです。**

**しかし、モーセにも寿命がありますから、モーセは次の世代の人々のことを案じて、いわば遺言として、次の世代にたてられる預言者たちのことを取り次いだのでした。**

**その預言者たちにかんする神の言葉の中身を聞いてみましょう。**

**申命記/ 18章19-20節**

**彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。**

**ただし、その預言者がわたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語り、あるいは、他の神々の名によって語るならば、その預言者は死なねばならない。」**

**この預言者と言う言葉を、今の世の預言者である牧師と置き換えますと、実におそれおおく身につまされる言葉となるでしょう。今ここで語られている説教が勝手に語られるのではなく、神の言葉に忠実である時、その言葉は聞き従うべき言葉とされるということです。しかしながら、その言葉が、神の言葉に忠実であるのかそれとも勝手であるのかという判断は、一体だれがするのでしょうか。難しい問題ですが、思い切って、ざっくりとわかり易く言えば、この問題を、人間が判断し出すようになれば、行き着く先は律法学者たちがたどり着いた律法主義の世界ということになるのでしょう。**

**人間が律法主義的になってしまうのか、反対に、寛容で平和に満たされるようになるのかには、とてもわかり易い標識があります。それは、その人が謙遜な人か、それとも傲慢な人であるかということです。**

**聖書の中で、この人こそは紛れもなく謙遜であると認められているのはただ二人だけです。それはモーセとイエス様だけです。**

**民数記12章 3節**

**モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。と記されています。**

**主なる神は、この様にモーセが謙遜な人であったゆえに、彼に神の言葉を託されてのですが、神の言葉を最後まで受け止めていくには、謙遜、従順こそがその要件となることでしょう。**

**申命記/ 18章19-20節をもう一度読みます。**

**彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。**

**ただし、その預言者がわたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語り、あるいは、他の神々の名によって語るならば、その預言者は死なねばならない。」**

**この神の言葉を聞いて、ある人たちは、恐ろしくなって、身構えして自分勝手に自分を守ろうとし出すかも知れません。律法学者たちもこの神の言葉に記されている権威を利用して自分や自分が属する組織を守り始めたのでしょう。**

**私たちは、何でもかんでも、方向性をわきまえずに学び続ければよいという訳ではないようです。そしてその学ぶべき正しい方向性をも、よく読めば申命記に記されています。**

**モーセは自分が死んだ後の次の世代の人たちが（申命記18章 16節に書いてあるように、）「二度とわたしの神、主の声を聞き、この大いなる火を見て、死ぬことのないようにしてください」と、主なる神によりすがって求めた時の、神のお応えとして、「その預言者は死なねばならない。」という言葉を取り次いだのでした。この様に、謙遜なモーセは、次の世代が神に守られるようにと願って、神の言葉を取り次いだのであって、決して自分や自分が属する組織を守るために神の言葉を語ったわけではなかったのでした。**

**イエス様が会堂で、「黙れ。この人から出て行け」と叫ばれたのは最早、教師の範疇を超えて、まさに預言者と呼ぶに相応しい言動であったと思いますが、教師と預言者は、人々を教え導くという意味で重なってきます。私たちは「死ななければならない」という神の言葉に恐れる必要はありません。なぜなら私たち自身が、主イエスによりすがって「死ぬことのないようにしてください」と懇願している者たちだからです。ですから、私たちは十字架の死に至るまで主イエスに忠実であることが、実は永遠の命の道であることを知ることが出来るのです。（コリントの信徒への手紙一/ 01章 25節）神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。というパウロの言葉をかみしめながら、私たちは今日も預言者イエス様に救われながら、彼の後について参りましょう。**

**お祈り**

**父なる神**

**あなたは私たちを聖霊で満たし、汚れた霊から守っていて下さいます。その大いなる救いの御業に感謝し、あなたをほめたたえます。**

**御子イエスは、怖気づくことなく、聖霊によって汚れた霊を追い出し、この人をお救いになりました。私たちも御子イエスにならい、現状に安住するのではなく、次の世代のために、救いの御業にあずかっていくことが出来ますように。**

**今の世にあって、私たちの前には多くの課題が山積しています。多くのことが学ばれなければなりません。その処に、御子イエスがお立ちになって、光を照らし、私たちがまことに学ぶべき事柄を示して下さします様に。**

**私たちが常に礼拝を大切にし、あなたに立ち帰って、その歩むべき方向を見誤ることがないように、いつもいつもあなたの慈しみとまことによって私たちを休ませ、導いて下さい。**

**多くの悲しい出来事が、この世の恐怖と憎しみによって生み出されています。どうか私たちがその汚れた霊に加担することがないように、私たちの内にある恐怖と憎しみの小さな芽を摘み取って下さい。**

**私たちの内に、よいことと悪いことを見分ける、愛の心を与え、この一週間の日々も常に愛の業に励むことが出来ますよう、励まし導いて下さい。**

**父と聖霊と共に**